



地球と宇宙の文化心理学

第3回 解題：「第二の皮膚」(1)

土元 哲平

はじめに

本稿では、連載第2回の詩「第二の皮膚」の解題として、ある人（筆者である私）にとって、月や地球がどのように経験されたのかをオートエスノグラフィー的に探究する。オートエスノグラフィーは、自らの経験を出発点として、その主観性と文化的・歴史的・社会的な結びつきを考究し、表現していく実践である。私たちは、夜空に浮かぶ月が時・場所を超えて不変であること、地球で生きているということを当たり前のものとして生きている。しかし、現在の宇宙開発の急速な進展を思えば、その「当たり前」が変わるのは、決して遠い将来ではない。なお、本解題は第3回と第4回の二回にわたって展開する。

風景の倫理：不可逆な変化を前にした「月」への気づき

「第二の皮膚」の詩を書こうと思ったきっかけの一つは、月という私たちの風景が、宇宙開発の進展とともに不可逆に改変されていくことに対する、「風景の倫理」ともいうべき視点を提示したいと考えたことにある。連載第1回で述べたように、私たちの世界は「文化化された自然」に溢れており、それらの自然は私たち自身と深く結びついている。にもかかわらず、そういった自然はあまりにも「当たり前」にそこにあるように思われるので、失われなければ「その自然がある（存在する）」という事実には気づかないほどである。

月も、まさにそのような自然の一つである。しかし、それだけでなく月は、時代や環境の局所性（ローカリティ）に左右されないという、特殊な位置を占めている。それは時代を超え、私たちが生きる地球の局所性という制約を超えて¹、ほとんどいつでも、どこからでも見えるのである。むろん、この意味では、太陽や火星、あるいは北斗七星を構成する星々など、「見る」ことの時空間を超越した天体は月に限らない。

それでも、なぜ月だけが特別に感じられるのだろうか。その理由は、第一に、私たちが地球上から月の「表面」を「眺める」ことができるということである。これは、太陽や、他の天体には生じない点である。第二に、地球上から表面が見えるということは、地球から見た月の景観が「改変可能である」ということを意味する。当たり前のように聞こえるかもしれないが、アポロ計画以前は、月面の見えが変わるということさえ、想像もできなかったら

¹ 地球における自然環境はあまりにも多様であり、私たちが共に生きる自然の風景や、自然との関係性のあり方は、それぞれがローカルである。しかし、月はそうした地理的制約を受けず、ほとんどあらゆる場所から見るができる。

う。つまり月の改変可能性は、現代において「発明され」（基地建設や長期滞在の技術）、急速に高まっているといえるだろう。

さて、近い将来、人類が月面に基地を築き、有人ローバーによる長期滞在を実現する未来が訪れる。私はそこに人類の大きな可能性を感じる一方で、風景という視点に立つと一抹の不安も覚える。未来の風景を想像すると、月が「これまでとは異なる存在」へと変わりつつあるかのような感覚が生まれるのである。それは決して善悪の問題ではないものの、技術や政治が主導する宇宙開発が加速するなかで、こうした風景に対する倫理的な議論は置き去りにされてはいないだろうか。この揺らぎが、私が詩を書く原動力となったのである。

月と地球を詩学する

2025年7月11日の満月の夜。その日はバックムーンとも呼ばれる満月だった。私は、いつもより一回りも二回りも大きく見える月に圧倒されながら、月面上から地球を見つめている自分を想像していた。後述するが、この時に月に圧倒される感覚も、振り返ってみれば幼少期の頃以来に感じた、奇妙な感覚だった。

私の「実験」は、「アポロの宇宙飛行士が見た地球」を、自分の身体感覚として経験しようというものだった。なぜなら、月で人間が暮らす未来を思い描くとき、まず「風景」として立ち上がるのは月の地表そのものではなく、「月から見える地球」だと考えたためである。そしてその「地球」は、私たちが地球から眺める「月」よりも、はるかに美的で、深い意味を帯びた風景となるだろう、と確信していた。

地球は月の直径の約3.7倍、体積にして約13.5倍。月は腕を伸ばすと小指の半分ほどの大きさに見えるが（視直径で約0.5度）、地球は小指2本分よりやや小さい程度の大きさになる（図1）。私は毎日のように、自分の指先と月を重ねて地球の大きさを確かめていた。光と影が絶えず入れ替わり、自転しながら刻々と姿を変えていく地球のダイナミックな存在感は、地球上での月とは比べものにならない。雲は形を変えながら流れ、太陽光が海面を照らし、その反射が青い地球光となって月面をほのかに照らす。月に立つ者にとっての地球は、平面的な風景として「眺める」ものというより、むしろ有機的な生命体として「存在する」ように感じられるかもしれない。

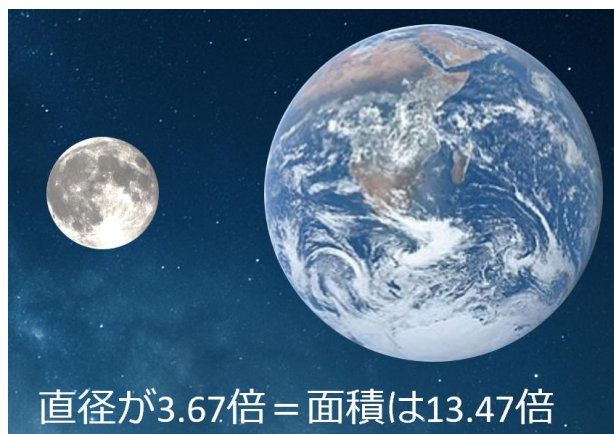


図1 地球から見た月と、月から見た地球

(月と地球の画像の出典：NASA)

しかし、宇宙飛行士の語りやメディア（YouTube やアポロ計画のアーカイブ写真）を通して、どれほど「宇宙から見た地球の美しさ」を想像してみても、想像は究極的には現実の知覚には届かないことを知っている。この数か月、私は地球を手触りとして感じる様々な実験的試み——これを「地球の詩学」と呼びたい——を続けてきた。地球を何度も絵に描き、飛行機の窓から遠くの水平線を眺め続けても、宇宙空間のような無限の闇との対比のなかで、地球が生命的な輝きを放つ姿にはなかなかたどり着けない。そこではじめて、地球には大気があり、あまりにも明るすぎるのだと気づくことになる。

思い返せば、幼少期の日課は、玄関先で父に買ってもらった望遠鏡を覗き込み、月を眺めることだった。月の肌理（きめ）は、どれほど見つめても飽きることのない豊かな風景だった。月の位置が変わるたび、望遠鏡の調整ノブを回し、地球が回転していることを身体で感じた。しかし私は、教育学や心理学へ進んだ頃から、月を眺める習慣をいつの間にか手放していた。ところが 2025 年から立命館大学 宇宙地球探査研究センターで、宇宙と関わる機会が増えたことで、私は久しぶりに「満月に圧倒される」自分がいることに気づいた。それは、かつて宇宙に憧れた理科少年だった自分に、巡り巡って再会した感覚だった。

地球と月、今の自分とかつての自分、——それらが同時に重なり合いながら、私はあの日の満月を見上げていた。

(次回へ続く)

参考

- 立命館大学 宇宙地球探査研究センター <https://esec.ritsumei.ac.jp>
- おすすめの地球俯瞰映像「Ultra High Definition (4K) View of Planet Earth」NASA Johnson (@ReelNASA) <https://youtu.be/oFDeNcu3mnc?si=YGm-WAdovha2Lfgr>